

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第七十回）

「秋の野の花を詠む」

次の二首は山上憶良のいわゆる秋の七種の花の歌であるが、この歌は憶良が子供たちに七種の花の名を教えた時の歌であるとの説がある。

あき

さ

1) 秋の野に 咲きたる花を

およびを

かぞ

指折り かき数ふれば

ななくさ

七種の花

其の一

卷八―1537 作者…山上臣憶良

（解説）秋の野に咲いている花、その花を指を折って数えてみると、七種の花があるよ。

はぎ

をばなくずばな

なで

2) 萩の花 尾花 葛花 瞿

しこ

おみなえし

ふじ

麦の花 女郎花 また藤

ばかま

あさがほ

袴 朝顔の花

其の二

巻八—1538

作者…山上憶良

(解説)

一つ「萩の花」二つ「尾花」三つに「葛の花」

四つに「なでしこの花」五つに「おみなえし」

六つ「藤袴」七つ「朝顔の花」。これが秋の七種の花だよ。

◇「萩の花」山野にひろくはえる落葉木、まめ科、秋には多数の紅紫色で蝶形の花をつける。

◇「尾花」現代名は「すすき」別名を「かや」ともいう。秋には茎の頂きに黄褐色または紫褐色の花序をつける。いね科

◇「葛花」まめ科のつる性植物。原野や山地に生え七月九月にかけて赤紫色で蝶形の花をつける。

◇「なでしこの花」山野にはえる多年草。夏から秋にかけて分枝し、その先端に淡紅色の花を開く。

◇「おみなえし」日当たりの良い山地や草原に生え晩夏から初秋に茎の先に多数の黄色い小さな花を集まって咲かす。

◇「藤袴」川べりの土手などにはえる多年草。八月～九月頃に淡い紫色の多数の頭状花がつく。
別名「くるまばひよどり」ともいう。

◇「朝顔の花」あさがほは、従来、ムクゲ、アサガオ、キキョウ、ヒルガオなどとする説があつたが、現在はキキョウとする説が有力である。
キキョウは山地、原野の乾地にはえる多年草で、夏から秋にかけて茎の上部で分枝し、青紫色の鏡形の花を開く。

・右の二首は万葉人が特に好んだと思われる花を山上憶良が詠んだ秋の七種の花の歌である。二首の最後に「其の一（一五三七）」「其の二（一五三八）」と記してあるとおり

二首は連作で密接な関係があり殆んど二つで一つの作のような形をしているといわれる。

- ・伊藤博氏は「萬葉集釈注」の中でこの歌は第一首に詠われている「指折りかき数ふれば」の指折りは「両手を掲げて十本の指を順次折って行くさまをいう」とあり、この指を折って見せて「七種の花」の名を提示するような相手は子供たちに対する動作であり、また、「指」をオヨビと呼ぶのは古書等から古くは子供向けの言葉であつたと推測されると記す。

- ・この山上憶良の秋の野の歌二首は前後の歌から判断すると憶良が筑前（現・福岡県北西部）の国守（地方長官）であつた真最中の天平二年（七三〇）秋に任地を巡察中、野に咲く花をちぎって遊ぶ子供たちを目にして、大勢の子供たちを呼び寄せ、世にいう秋の七種の花の名を指をおって教えたのではなからうかと推測をするとある。

（参考文献）伊藤博著「萬葉集釈注」、「牧野日本植物図鑑」、大貫茂著「万葉花の名歌」他

(写生地) 山上憶良が筑前の国守として神亀五(728)

年任地を巡察した折に訪れ、「嘉摩三部作(本シリーズ第3

7回)」を撰定したとされる嘉摩郡かまのこおりの郡家(地方役所)は現

在の福岡県のほぼ中央に位置する筑豊地方(遠賀川流域を指す地域名)の南部に位置する嘉摩市辺りとの説が有力である。

この歌が詠われたといわれる天平二年の任地を巡察した際もこの地を訪れたと推察される。いつも元気な子供たちの声が聞こえる、古代、嘉摩郡家と呼ばれた役所址(嘉麻市稲築町鴨生)の推定地近くにある鴨生公園一帯風景を描く。(杏花)

